【第三種郵便物認可】

読書

あとがきのあと

「築地―鮭屋の小僧が見たこと聞いたこと」　佐藤　友美子氏

先月11日、東京・築地の場内市場が豊洲に移転した。一方、周辺の場外市場はこれまで通りに営業を続けている。「場内と場外があって築地だと思っていた。早朝に響くターレの音や人の気配が消え、ようやく移転を実感した」と話す。場外にあるサケを扱う店で30年間生きてきた。そこでの経験や出会いを、築地の歴史とともにまとめた。

20代はライターとして、世界中を旅する日々。30代を目前に訪れた築地で運命

（さとう・ゆみこ）1960年東京生まれ。フリーライターを経て、20代後半に築地場外のサケを主に扱う店に入る。2013年に前の店主から店を引き継いだ。

街作ったたくましい人たち

は大きく変わる。「人は要りませんか？　と目の前のサケ屋のおやじに声をかけていた。特別サケが好きだったわけでもないし、理由はわからない。たぶんまいにそう言わせるものがあったんでしょうね」と笑う。

場内を勢い良く走るターレから「このばかやろう！」とあいさつ代わりにののしられるのは日常茶飯事。独特の文化に戸惑いながらも、徐々にその奥深さに魅了されていった。「マグロを切る人、貝をむく人、目利きをして、売る人がいる。ものすごく層が厚くて、毎日学ぶことがある」

築地は関東大震災後、日本橋から魚河岸が移って生まれた。移転を巡る権利問題や、売る物がなかった戦後の苦境など当時を知る人々の話も聞き取った。「終戦後すぐに、おひな様やかぶとを引っ張りだして米兵に売ったというからたくましい。そういう人たちが街を作ってきたという事実を残したかった」

30年の間に築地は大きく変貌した。大型スーパーが各地にでき、町の鮮魚店や青果店が消えていったことでプロの男たちが減った。一方、一般客が増え、今や一大観光地だ。「ターレが走り回る場内を乳飲み子を連れた女性が歩いているのには驚いた」と振り返る。

場内の移転で、さらに変化は続く。「これまでは黙っていても人が来てくれたが、そうはいかない。信頼し続けてもらうために、先人から学んだ場外らしさを大事にしていきたい」。窮地をたくましく生き抜いてきた築地の人の顔だった。

（いそっぷ社・1600円）